

活 動 報 告

神奈川大学共同研究奨励助成研究グループ

『世界の色の記号に関する実証的研究—自然・言語・文化の諸相—』活動報告

人間科学部 三星宗雄

1. 概要

今年度は3名のメンバーが海外に出かけ調査研究を行った(2009年1月16日現在)。また研究会を3回開催し、4本の論文が公表された。このテーマに関する学会・シンポジウムでの発表を2回行なった。今後3月末日までに何人かのメンバーが国内・海外において調査研究を行う予定である。

2. 研究会

(1) 第1回

- ・2008年6月25日(水) 15:00～17:00
- ・17-216室
- ・報告者
 - a. 行廣清玉(鎌倉華道会 上代古流教授)
「色彩と空間—ハワイにみるフラワーデザイン—」
 - b. 加藤 薫(神奈川大学経営学部)
「サンタ・ムエルテ図像と色彩」

(2) 第2回

- ・2008年11月5日(水) 15:00～17:00
- ・14-32室
- ・報告者
八久保厚志(人間科学部)
「韓国色彩景観に関する調査報告」

(3) 第3回

- ・2009年1月23日(金) 15:00～16:30
- ・17-216室
- ・報告者
三星宗雄・新山春道
「デジタルカメラの録画機能を利用した色名の色空間上における認知範囲の測定法について」

3. 学会発表・シンポジウム

(1) 三星宗雄

- a. 日本環境心理学会設立記念シンポジウム
 - ・2008年3月28日(金)
 - ・日本大学文理学部百周年記念館
 - ・シンポジストとして参加
 - ・テーマ 「環境心理学の枠組みを枠組みを考える」
- b. 日本心理学会

- ・ 2008年9月19日～21日
- ・ ポスター発表
- ・ 題目「沖縄の色彩」

4. 研究論文

- (1) Cha Jeong min & Yokota Masao (2008)
The effect of relation in Korea/Japan and technical experience in visual art on affective meaning of color. Journal of Korean Society of Color Studies, 22, 3, 35-44. (韓国語による論文。英文の要約あり。)
- (2) 畑田明信・三星宗雄 (2008)
「減色された画像の評価についての試み」, 神奈川大学人文研究 166, 55-64.
- (3) 三星宗雄 (2009)
「公衆トイレのアンソロポロジー」, 神奈川大学人文学研究所報 42, 13-32.
- (4) 三星宗雄・新山春道 (2009)
「デジタルカメラの録画機能を利用した色名の色空間上における認知範囲の測定法 (速報)」, 神奈川大学人間科学研究年報3 (印刷中).

5. 加藤薫 (神奈川大学経営学部 教授)

- ・ 当該報告：2008年度分
 - ・ 研究分担領域：スペイン語圏における色彩文化の記号学的研究
 - ・ テーマ：メキシコにおけるサンタ・ムエルテ画像の色彩に関する記号学的解釈
- <報告>

1. 概況

- ① 2007年度に私費にて実施した予備調査 (2007年9月1日より9月5日の5日間), および当該共同研究助成金予算にて実施した本調査 (2008年2月28日より3月8日の10日間) において収集した映像資料, 文献資料, および色材資料を整理・検討した。
- ② 2008年6月25日に横浜キャンパス (17号館-215) で開催された当該共同研究プロジェクト研究会にて, 主として色彩の象徴機能についての1時間程度の中間報告を行う。(パワーポイント編集資料使用および色材資料の展示)
- ③ 2008年9月6日より7日の2日間, グアテマラ共和国チチカステナンゴ市内・近郊において, サンタ・ムエルテ画像起源の一つと想定されている聖パスクアル画像を調査し, 資料, 見本も購入。またローカルな民俗色強い聖シモン信仰で使われる画像も聖パスクアル画像の並行現象とも想定されることから祭壇, 資料館などの現物調査を実施。
- ④ 2008年9月9日の一日, グアテマラ共和国パナハチエル地域の湖岸村落に存在するマキシモン信仰 (聖シモン信仰の変形バージョンでサンタ・ムエルテの起源に関与したとの仮説から) の実態と画像の調査実施。
- ⑤ 2008年9月22日午後, メキシコ市テピート地区のサンタ・ムエルテ礼拝堂訪問。管理者であるエンリケタ女史から最近の動向について聞き取り調査。
- ⑥ グアテマラにおいて収集した聖パスクアル関連資料の整理, 研究。

2. まとめ

- ① 聖パスクアルに関する画像研究の先行事例はまだ少い。数名の人類学研究者による歴史的, 民俗的研究があるのみで, 色彩豊かな織物伝統を持つグアテマラのマヤ系先住民伝統文化との相

関関係の調査など今後もフィールド調査が必須な分野である。

- ②メキシコ市におけるサンタ・ムエルテ信仰は近年一般市民への露出度を高めてきたが、そのことへの反発から弾圧の動きも顕著になってきている。従って社会的文脈からもサンタ・ムエルテ研究の重要性、緊急性が改めて認識されてきている。
- ③色の識別の概念や色認識とポテンシアル（色に託された能力や意味）の関係、新素材の導入などの試みや動機、DVD映像などの研究が今後の課題であるが、ダイナミックに変容を重ねる現代大衆文化の実態をリアルタイムで追うには限界があり、克服しなければならない課題である。

6. 行廣清玉（鎌倉華道会会員 上代古流教授）

「色彩と空間 ―ハワイにみるフラワーデザイン―」視察・調査報告書

はじめに

この研究グループに参加させていただいたのは、華道を“色彩と空間”という視点から見直してみようと考えたからである。華道に長年携わり、自ら歩んできた創作活動を“色彩と空間”という切り口から考え直そうとする時、日本以外の国（地域）ではどんな花が飾られ・生けられているのかわからずして、それは出来ないことであると気がついた。また、より広い視点から考えようとすれば、ますます国外でその現場を見ることは、必要なことであるといえよう。加えて、我が国日本の伝統文化といわれる華道の内だけで見聞きしていた我が身を振り返り、華道家としての視点で、国外で飾られ生けられた花を見てみたいという思いが湧き上がり、海外視察をすることにした。

「井の中の蛙大海を知らず」の蛙にならないように、少しでも別の世界を見ておくことに意味があると思ったからである。

I. 視察調査地の選定理由

- ①調査時期は、各地においても花が多い時期であること。
- ②“生けられた花”が数多くあり、それを容易に見学できること。
- ③通訳を兼ねた、現地地理に詳しい案内人を手間暇かけずに頼めること。

以上の3点の条件を満たす場所が、私にとってハワイであった。

当初の計画では、ハワイ州を構成している主な7島の内の3島を訪ねる予定であったが、③の条件の制限から、2島の視察・調査となってしまったことは、少々残念なことではあった。しかし、次回の訪問の視点をよりはっきりさせてくれたことでは、これも成果とみている。

②の条件を満たす所として、リゾートホテルのフロント前やロビーを念頭に入っていた。なぜならばそれは、ハワイを以前に訪れたことがあり、あるホテルのエントランスに生けられていた花に非常に強い感銘を受けたことである。いわゆるT・P・Oがみごとに取り入れられた“活け花”であった。他国の地で出会った“心に響く”フラワーアレンジメントとして今なお鮮やかに思い起こすことが出来る。このことから、それらの場所に“飾られた花”があることを知っていたことである。

II. 視察調査期間

日本を離れていた期間は2008年3月19日～4月5日あるが、現地での案内人（オアフ島在住）とのスケジュールの打ち合わせと調整にかなり時間をとってしまった。仕事を持っている人に、ボランティアを頼むのであるから無理も言えず、致し方がないことである。さすがに、カウアイ島（3月24日～26日）へは休暇を取ってもらい同行を願った。オアフ島では、バスで動ける範囲は1人で回り、宿泊場所から遠方は、仕事の合間をぬって車で案内をしてもらった。

Ⅲ. 視察調査地の訪問件数

①カウアイ島 6か所（以下）

Resort Quest Kauai Beach at Makaiwa , AlohaBeachi Hotel,
Marriott Kauai Resort & Beach Club, Sheraton Kauai Resort,
Grand Hyatt Kauai Resort & Spa, Princevill Resort Hotel

②オアフ島 10か所（以下）

Halekulani Hotel, Sheraton Waikiki Beach Hotel ,Sheraton Moana Surfrider, Royal Hawaiian
Hotel, Hyatt Regency Waikiki, Hawaii Prince Hotel, Ohana Waikiki Maria Hotel, JW
Marriott Ihilani Resort & Spa at Ko Olina, Kahala Resort Hotel, Turtulebay Hotel,

Ⅳ. エントランスホール・ロビーにある生け花の紹介

撮影した写真の中から、カウアイ島3か所、オアフ島4か所の7枚を取り上げ、解説を加えてみた。

① Marriott Kauai Resort & Beach Club（カウアイ島）



上部は、垂れ下がる形状のヘリコニアで動きを出し、硬さが出てしまう大きなヤシの葉の強さを和らげている。中段は、緑に映えるオレンジの小ぶりのヘリコニアとヤシの葉の強さに合う赤のジンジャーとでつり合いをとっている。花瓶に近いあたりでは、クルトンの厚みのある大葉・ヘリコニア・赤のアンスリウムで再び力強さを表現している。

花瓶は鮮やかなブルーで配色的な疑問は残るが、置かれていた所が暗い場所であっ

たことと、生けられた花全体の印象が強いのので、あまり違和感はなかった。

② Sheraton Kauai Resort（カウアイ島）



頂点にヘリコニアの軸を高く伸ばし、次の位置にその黄色と赤の花を配している。中段は、明るい緑のハランやドラセナ類の葉物を入れ、白のアンスリウムも加わって、柔らかさと広がりを醸し出している。花瓶の口あたりでは、緑濃い大きなモンテスラの葉、丸めてボリュームを出したハラン、明・彩度の高い赤のオバケアンスリウムを使い、強くどっしりとした感じを与えている。

全体の形状は円錐形である。花瓶は、大地を彷彿させるレンガ色の素焼きのものを使っている。

③ Princevill Resort Hotel (カウアイ島)



これは、偶然にも生け込みが始まる時に遭遇し、一部始終を見学できた作品である。

生け手は、MR FLOWERS KAUAI という花屋さんの奥さん（Wendy）であり、ニューヨーク出身の祖父母がこの地カウアイに移住し、その3代目に当たるとか。

花材は、屋外にある花や草木がまんべんなく使われているような印象。花ではジンジャー類各種、アンスリユームの赤・緑・ピンク・白各色、ストレチア、レンギョウ、

葉物ではモンテスラ、ハラン、アレカヤシ、ドラセナ、ティーリーフ等。花材をボリュームたっぷりに使っていた。

花瓶も花や葉が鮮やかに描かれた焼き物で、花木と花瓶が一体化して見えた。エントランス中央のテーブル（高さ1.5m程）に置かれているので、天井のシャンデリアに届くほどの高さになっていた。

ホテルのエントランスに生ける花に、どんなコンセプトを持って当たっているのかを聞くと、「この地を訪れる人々は、たくさんの自然とたくさんの花を楽しみにやってくる。であるから、時季の一番きれいな花をたっぷり見せてあげたい。ハワイでしか見られない美しさを堪能してほしい。」とのことだった。

④ Halekulani Hotel (オアフ島)



ロビーに置かれていた作品。上部はネコヤナギを使い、空間の広がりや軽やかさを表現。中段は柔らかな色合いのピンク系のジンジャーを用いて上部の柔らかな表現を壊さないようにしている。花器の口にはモンテスラの葉と明るい緑のアンスリユームを使い、ジンジャーとアンスのつながりに黄色系のランを配することで配色の流れを乱さないようにしているのが窺える。シンプルでありながら、空間の大きさと大地の力強さが伝わってきた。

花器は、木製の桶。日本の華道の影響を受けているように思えた。後で問い合わせると、生け手はホテル内のフラワーショップの女性従業員で、草月流の心得のある日系の方とのことだった。

⑤ Royal Hawaiian Hotel (オアフ島)



出しているような作品。

高さは4m位、間口2mにもなる大作が、大きなダイニングテーブルの上に据えられ、フロントとロビーの仕切りとなって置かれていた。

トップはヘリコニアの軸。続いて黄系ヘリコニアの花と赤のジンジャーを塔のように配し、中段から下にオレンジ系ヘリコニアと赤ジンジャーと明るい緑系の葉を入れ、すそ野は大きく広がる草原のように、大きな幅広のハランを使って雄大さを表現しているように見えた。あたかも、ハワイの高い山々と花咲くふもとの景色をイメージしているかのようであった。ホテルの名に冠しているように、ハワイ州の伝統的な景観を心情からも描き

⑥ Hyatt Regency Waikiki (オアフ島)



吹き抜けのエントランスに飾られていた作品。高さは4mを超えていそう。台座が1.5m程あるので、少し距離をとって見ないと全体を把握できない。暗い空間に重々しく飾られていた。

上部から、ネコヤナギ、黄ヘリコニア、赤ジンジャー、赤・緑の葉もの、緑と白のアンスリューム、小ぶりの赤ジンジャーとモンテスラの強い緑を配した花材の構成。

花器は黄色の壺。配色のコントラストが強烈であるが、周辺が暗く、そのコントラストの強さを感じさせず、この場では必要な配色とみた。

⑦ JW Marriott Ihilani Resort & Spa at Ko Olina (オアフ島)



形態のオレンジの花を用いて、柔らかさと広がり表現し、下方は彩度の高い緑や赤で、華や

生け替え日・時を聞き、作成過程の見学とインタビューを申し入れ、生けあげの様子を見ることができた作品である。

生け手は日系の男性 (Mr. Alan) で、ホテルの従業員。ホテル内の切り花に関すること全てを担当し、自ら花屋に出向き、花材を調達すること。

花材は、サクラ、ジンジャー (ピンク・オレンジ)、アレカヤシ、ストレチア、アンスリューム、モンテスラ。

上方は薄いピンクやボリュームのない

かさと重みを出している。

花瓶は、白に近い生成り色で、ホールの白さに調和し、全体を品の良い美しさを漂わせる作品にして完成させている。

吹き抜けになったエントランスホールに生けるときに注意を払うことは何か、と尋ねると、「全体をシンプルにまとめることで、ホールの高さを強調し、その空間を引き立たせるようにしている。来訪者に、花のある気持ちよい大きな空間を感じてもらい、ホテルに好感を持ってもらえるようにと考えている。」と彼は語ってくれた。

V. ハワイの生け花の特徴

上記、Ⅲ) で一部の作品を紹介したが、その他の場所で多くの作品を見て歩くうちに感じたことは、以下のとおりである。

- ①全体の構成は、大自然の中に生きる人間が見ている景観をなぞって表現されているといえる。つまり、背丈が高く生え、花咲かせるものは高い位置に配し、地面に近く葉を茂らせるものは、花瓶の口に沿って使っているということである。
- ②生けられた花の全体の形は、ほとんどの作品が円錐形となっており、全方向からの観賞が出来るものである。
- ③広い空間（エントランス・ロビー）におかれている作品は、その中での存在をアピールするためにも、作者の美的感覚の意思表示が濃く滲んでいるようだ。気候的土地柄も加わって、個人の強い意志を感じさせるものである。
- ④花材の色彩の選び方（＝色の取り合わせ）を観察してみると、人の目に映った時、いかに強く印象を与えるかを主眼に選択されているようだ。“花が飾られている”という全体のイメージを強調するために、色合いが選ばれている感を覚える。
- ⑤花材の色彩の配置は、高い位置（＝空に近い）ほど淡い色彩を使う傾向が見られ、上部と下部の比較では、明度は上部>下部になっている。

おわりに

この視察調査報告を終えるにあたって、今回の海外での視察は、本題である“色彩と空間—華道の視点から—”の研究を進める上で、大変良い体験となり、これを発展させる起爆剤となったことに感謝します。これから余すところの時間を、より良い研究論文に仕上げるため、私にとっての“外の世界を訪ねる機会”を多く作ってゆきたいと思う。

7. 八久保厚志（人間科学部）・山本俊雄（工学部）

・景観に関する色彩研究班—景観と景観色に関する建築物からの視点—

1. 2007～8年度における活動

景観に関する色彩研究班は、前年度に引き続き、人文景観を構成する住宅（一般住宅）を指標に調査分析を行った。とくに、沖縄、瀬戸内海沿岸地域、韓国（ソウル・インチョン）において、景観色に関する実態調査を行った。沖縄の調査は、2008年2～3月に、那覇市を中心とした南部地域（2月）および石垣島を中心とした先島地域（3月）で行った。また、韓国調査は、2008年3月にチェジュ島（済州島）で行った。9月にソウル・インチョンを中心としたソウル首都圏（京畿道）で行った。さらに、瀬戸内地域の調査を2009年1月に広島県鞆の浦地区を中心に行った。以下、沖縄地方と韓国調査の概要を示す。

(1) 沖縄地方調査（2008年2月、3月）

1) 沖縄本島南部地域

那覇市を中心に、1990年代後半に日本建築学会の構造委員会で調査を行った地区の変化を中心に景観記録を行った。調査地は、糸満市、那覇市、浦添市、宜野湾市、豊見城市である。また、那覇市では、新交通システム（ゆいレール：モノレール）沿線各駅周辺の都市開発地域を中心に変化する都市景観を記録した。

2) 先島地域

先島地域では、石垣島および与那国島を中心に景観色の調査を行った。1990年代後半に行った科学研究費（工業地域の高度化に関する実態調査：代表竹内淳彦、日本工業大学教授）における調査で行った産業景観の変化と、日本建築学会で行った沖縄の組積造建築物に関する調査および科学研究費（沖縄地方の組積造建築物調査：代表松村敏神奈川大学教授）で行った石垣島全域の住宅景観調査地の変化と、景観色に関する調査を行った。

(2) 韓国調査（2008年3月、9月）

1) チェジュ島（済州島）調査

韓国における春の景観色調査を韓国最南端のチェジュ島の都市部（済州市、西帰浦市など）と観光団地、民俗村（保存地区）や漁業集落、農村地域の景観、景観色記録と資料収集を行った。チェジュ島はハルラ山を中心とした火山性の土壌が卓越し、柑橘類の産地でもある。そのため、建築物の借景としては花卉や果実が鮮やかにその構成要素として際だっている。初春の景観から初夏・盛夏・秋・冬とその変化が予測され、少なくとも四季の景観を記録する必要性が感じられた。

2) ソウル市・周辺地域

ソウル市内は、主にキョンドクン（昌徳宮）やチャンドクン（景福宮）などの歴史遺産・世界遺産、東大門市場、南大門市場、忠武路などの繁華街、仁寺洞および周辺地域の伝統的工業（韓服、木工品、菓子・食品など）地域および「下町」地区の景観、景観色の記録、資料収集などの実態調査を行った。また、ソウルから安山市までの地下鉄4号沿線の工業地域の産業景観のいくつかの景観を記録したほか、安山工業コンプレックスのヘッドセクターを訪問し、安山サイエンスパークの構成や構造、土地利用、景観構造などについて聞き取り調査、資料収集を行った。

3) 仁川市・周辺地域

近代に形成された港町としての仁川について、ソウルから漢江沿岸を通る地下鉄1号線を利用し、沿線の景観を記録した。また、チェムルポおよび漢江の氾濫原地域の視察を行った。その後、仁川駅周辺で進められている中国人街の再構築事業を視察、景観上の民族的差異、様々な景観構成要素の色づかいの違いを記録した。自由公園からの仁川港の現状を確認し、歴史的市街（保存地区）で、日本人街に残るいくつかの建築物を中心的な構成要素とする景観の記録、地図類等資料収集などの実態調査も行った。

(3) 瀬戸内地域の調査

沖縄から韓国京畿道地域、済州島などの実態調査の結果と日本の景観色の比較のために、2003～7年におこなった神奈川大学COE事業（非文字資料の体系化に関する拠点形成）の成果の一部である、日本の海岸地域の集落に関する景観研究と比較するための調査を行った。

2. 2009年度の研究計画について

2009年度は、2007～8年度に行った実態調査を基礎に、これまで担当者が蓄積してきた研究実績も生かし、景観と景観色に関する地理学および建築学的視点からのまとめを行う。

8. 新山春道（人文学研究所特別所員）

『源氏』色語り—平安朝の色彩と文化—（2007. 2. 5）

・共同研究 「色彩と文化」主催の講演

『源氏物語』に代表される平安朝における色彩の問題の重要性を、諸作品の記述を具体的に提示しながら個別に指摘し解説を加えていった。

まず、導入として『源氏物語』千年紀の起算点となった『紫式部日記』の記事の中には、わずかな行事記録の中にも詳細で、且つ膨大な衣服についての記述、特にその色彩についての記事が多種多様にみとめられ、平安朝貴族たちにとって色彩がどれほどまでに関心の対象となるのかを示した。

第一項目としては、『源氏物語』の主層を貫く色—「紫」のゆかり—として、主人公光源氏の亡き母桐壺の更衣思慕の情が、亡母の面影を宿す藤壺中宮への慕情へと展開し、その許されぬ藤壺思慕は同じく面差しの酷似から若紫の君の奪取へと物語を導いて行くことになるが、その物語展開に、「藤」と「紫」の色彩の共通性をもつての両者の容貌の酷似の暗示や、『伊勢物語』などで有名な古歌による表現「紫のゆかり」によって、両者の血縁などが物語の裏側に響き合うように構成されており、その「紫」という色彩にまつわる表現が、若紫の君周辺表現には如何にふんだんに鑲められているかを示しつつ、その表現の効果と、そのもととなった当時の人びとの色彩「紫」への憧憬の念を述べた。

第二項目としては、「白の異空間—『紫式部日記』出産記録・「夕顔」物語—」と題して、平安朝の出産における色彩の「白」への統一という風習と、その中でもそれぞれに差違を競い合うという装束の飽くなき探求心を示し、また、その一方で、『源氏物語』において「白」という色彩を帯びて語られる女性「夕顔」について述べた。加えて、瑞祥としても代表的な色彩であるところから「白」による瑞祥の例を提示した。

第三項目としては、「官職と色—物のはじめの六位宿世よ—」として、光源氏の子息夕霧をめぐる物語や「滯標」の巻に語られる住吉詣での場面に見られる官職と色彩の問題について述べた。官位の相違を色彩によって弁別するのであるが、その際に絶対的に使用の禁止される色として「禁色」が存在する点や、その色彩の着用が特別に許可される事例などについてもふれた。

第四項目としては、「対立する色彩—決戦は赤と青—絵合」として、『源氏物語』「絵合」の巻に語られている物語絵を用いた対戦において、対抗する両陣営は、提示する物語の傾向のみならず服飾・調度品などの色彩の上でも対立するように構成されていることを示した。それは、物語における創出ではなく、村上朝において現実に挙行された「天徳内裏歌合」の様子を模したものであり、実際の感覚として色彩的に「赤」と「青」が対立概念であることを示した。又、現在においてもみることの出来る事例として、雅楽における舞楽でいがいとして対置される高麗楽と唐楽とが、それぞれ「右」「左」、「青」と「赤」とに対立的に配されていることを提示した。しかしながら、中国から移入された五行思想等においては「赤」と「青」とは、色彩的には対置されていないことから、節会における「青馬」が「白馬」になって行くこととあわせて、我が国における色彩観念と外来思想の受容のあり方についても述べた。

共同研究奨励助成研究グループ

『二重プロセス理論に基づく総合的な人間行動の理解とその応用に関する実験的研究』

1. 共同研究奨励金グループ名

二重プロセス理論に基づく総合的な人間行動の理解とその応用に関する実験的研究
～学際的学問分野の開拓と現代社会問題解決のための政策分析の実践～

2. 研究会の開催

第1回研究会

日時：2008年4月16日（水）14：40～16：10

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏（東京大学大学院）

P.Slovic (2000) Rejoinder : 「The perils of Viscusi's analyses of smoking risk perception (たばこのリスク論争について)」

第2回研究会

日時：2008年5月7日（水）15：30～16：30

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

William D. Diamond (1990) 「Effects of Describing Long-Term Risks as Cumulative or Noncumulative」 について

第3回研究会

日時：2008年5月21日（水）14：40～16：10

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

Sheldon Ungar (2007) 「Public scares : changing the issue culture」 について

第4回研究会

日時：2008年6月18日（水）15：00～17：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

「温暖化問題に対する市民の意識（アンケート調査結果より）」

第5回研究会

日時：2008年7月2日（水）15：00～16：30

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

「温暖化アンケートの分析結果について」

第6回研究会

日時：2008年7月22日（火）11：30～12：45

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

「喫煙リスクの蓄積性に対する認知について」

第7回研究会

日時：2008年9月5日（水）13：00～15：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

温暖化対策行動の主観的効果の規定因について

第8回研究会

日時：2008年9月12日（水）13：00～15：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

推論の二重プロセス理論と喫煙リスクの認知について

第9回研究会

日時：2008年10月15日（水）15：00～17：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

喫煙リスクを高める合理的な根拠とその伝達について

第10回研究会（兼人文学会講演会）

日時：2008年10月22日（水）15：00～17：00

場所：17号館216号室

発表：奈良由美子氏（放送大学）

「日常生活の安全に関する意識調査」の結果から

第11回研究会

日時：2008年11月5日（水）15：00～17：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

たばこの喫煙リスクについて

①リスク認知キャンペーンの掲示物について

②喫煙リスクの認知について（文献購読）

第12回研究会

日時：2008年11月19日（水）15：00～17：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

温暖化問題に対する市民の意識と行動について

第13回研究会

日時：2008年12月3日（水）15：00～17：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

喫煙リスクの認知に関する調査・研究について

第14回研究会

日時：2008年12月17日（水）15：00～16：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏

喫煙リスクの認知と思考特性との関連について

3. 活動内容

メンバー：

松本安生（人間科学部 人間科学科 准教授）

三星宗雄（人間科学部 教授）

坪井雅史（外国語学部 准教授）

渡辺照洋（経済学部 教授）

柴田直子（法学部 准教授）

今年度の研究内容

(1)二重プロセス理論に基づく人間行動の総合的な理解に関する理論的研究

分析的・理性的及び直感的・感情的な人間の意思決定の側面について、既存研究のレビューを行い、総合的な人間行動モデルの重要な基礎的知見として整理した。なお、これらの既存研究のレビューは非常に多岐な分野に及ぶため、効率的な整理のためには、それぞれの分野における専門家の協力のもとで行った。

(2)人間行動の総合的な理解に基づいた、現代社会問題解決のための政策分析に関する実験的研究

喫煙行動に関する実態とその意思決定要因を明らかにするため、神奈川大学横浜キャンパスで行った実験的なたばこリスク認知キャンペーンの効果について実証的な検証を行った。また、市民の温暖化防止行動に関する実態とその意思決定要因について明らかにするため、一般市民及び専門家を対象としたアンケート調査を行い、その結果について分析を行った。

以上

講演会要旨

1. 開催日：2008年5月28日（水）
2. 会場：17-216号館
3. 講演者：金應教（キム・ウンギョ）（詩人・早稲田大学客員教授）
4. 演題：「韓国現代詩の魅惑」
5. 要約：日本では現代詩が必ずしも人びとに深く受け入れられているわけではない状況のもと、現代詩が人びとの内面深くに位置づいている韓国の様子について概説をしていただいた。韓国において現代詩はどんな意味を持っているのか、それは解放後韓国の社会変化とどう関わっているのか。またなぜ韓国では現代詩がよく読まれ、詩作も活発なのか。隣国である日本との比較という意味でも、面白く、貴重な講演であったと思う。参加者も20名を越え、現代詩について考えを深めるよい機会になったと思われる。

（尹 健次）

共同研究グループ活動報告（2008年度）

日中関係史

一昨年、昨年と行ってきた学内共同研究奨励「戦前中国・朝鮮における日本租界の研究」は2008年3月までで終了したが、2008年度は、21世紀COEの継承として新たに発足した神奈川大学非文字史料センターの個別研究の1つとして活動を続けることができた。

また、06年3月で科研費の受給が終了した中国人日本留学史・日本人中国留学史の共同研究3年間の成果とその後継として発表した論文をまとめて1冊の論文・資料集を出す準備をすすめてきたが、幸いに科研費出版助成を得ることになり、09年2月には公刊できることになった。タイトルは、『留学生派遣から見た近代日中関係史』である。

以下は08年度に開いた講演会の一覧である。

1. 5月27日、二胡奏者今井美樹、アルパ奏者藤枝貴子による演奏と講演
2. 6月18日、塚田健夫、塚田淳夫氏
3. 9月24日、金山彦喜、近藤恒弘、近藤久義氏
4. 11月22日、松浦明子、佐藤佳子氏

2～4は天津日本租界在住者への聞き取り調査である。

他に、6月18日と12月18日には、租界研究グループによる打ち合わせを行った。

(大里浩秋)

文化のかたち

活動内容：

メンバー各自で自身の研究対象においての調査・考察・講演活動等を進めていった。メンバーの活動の代表的なものとして、5月24日に神奈川大学横浜キャンパスで開催した中本信幸名誉教授のプーシキンメダル受章記念講演「地獄か天国か？ —チェーホフの『診断』をめぐって—」などがある。

2月または3月に研究会を行い、今年度の各自の成果を報告する予定である。叢書としての『文化のかたち』第二弾の具体的な構想を検討して行くことを目標としている。

(堤 正典)

西洋文化の受容 ——思想と言語——

1. テーマ：近代日本における西洋文化受容の総合研究
2. 代表者：鈴木修一
3. 活動内容：5年間をかけて読み続けてきた『明六雑誌』の成果を、本研究所叢書20号

『明六雑誌』とその周辺——思想と言語——』として出版した。(2004年度)

その後、新たに近代初期の洋学資料を読む計画をもっているが、本年度は休会という状態であった。本年度春休み中に活動を再開する予定である。

(鈴木修一)

物語研究

1. 研究テーマ：物語の構造分析，歴史叙述と文学
2. 代表者：日高昭二
3. 活動内容：昨年の活動にも記したが，研究会のメンバーの大半が2005年に学内で採択された「協同研究奨励助成」と重なるため，研究会等は開かれていない。今年度も，協同研究「〈表象〉としての日本」の研究会への参加をよびかけてきた次第。
2009年3月で叢書を刊行して一応終了するので，2009年4月以降の計画については，メンバーとあらためて協議したうえで，活動を再開したい。

(日高昭二)

2008年度【各国地方史の比較的研究】

1. 研究テーマ：世界史を，国家，民族，文明というレベルで考察するのではなく，地方史のレベルから見直すこと。
2. 代表：村井寛志
3. 活動内容：
これまで，主に中国史研究者と多分や研究者の交流を中心に，年に数回の研究会を行ってきた。本年度は，下記講演会を一度開催したのみだが，次年度以降，例会の回数を増やしていきたい。
【講演会】「歴史的視野から見たチベット問題」
【講演者】柳静我氏（チベット史研究家）
【日時】2008年6月10日（火）午後1時～午後2時30分

(村井寛志)

自然観研究

1. グループ名：自然観研究グループ
2. 研究会の開催
開催日：2008年9月29日（月）
会場：17号館216室
発表者：佐藤夏生（神奈川大学外国語学部）

演 題：セナンクールにおける自然

——『オーベルマン（第3版）』を中心にして——

3. 活動内容

研究テーマを「自然観の変遷と展望」と決めて、思想、環境学、文学などの分野において、メンバーが代わる代わる幹事となって講演会を実施してきた。

昨年度からは、メンバーによる研究発表を順次、実行している。

グループ発足当初から叢書刊行を予定してきたので、発表会を通じて、哲学・思想および文学の分野を統合するような視点を探りつつ、刊行実現を目指している。

(佐藤夏生)

1. 東アジア比較文化研究会

2. 講演会・研究会の開催

2月に開催予定（孫玄齡 氏）

3. シンポジウム開催

無し

4. 活動内容

・7月末、杭州で開かれた「東アジア人物往来」シンポジウムに山口が参加し、講演した。

演題：「ウイロウ（外郎）・クグツ（郭禿）・サルガク（散楽）」

・研究会を最低年2回ほど継続していけるようにしたい。

その成果を発表するホームページを開設したい。

(山口建治)

「色彩と文化」

このグループは神奈川大学共同研究奨励助成研究グループ『世界の色の記号に関する実証的研究—自然・言語・文化の諸相—』とほぼ同じメンバーであり、現在はそちらの活動として行っているのでは割愛する。

(三星宗雄)

横浜研究

1. 横浜研究—横浜における多文化共生社会の創出に関する研究

2. 活動内容

2008年2月に研究成果を人文学研究所叢書として刊行したが、本年度は活動を休止した状態となった。来年度は今後の方針について決めることとする。

(横倉節夫)

神々のコスモロジー

本研究グループの新たなメンバーとして、外国語学部の橋本侃教授に加わっていただいた。本年は、個人個人の研究を充実させる期間としたために、グループとしての活動は行っていない。

今後に関しては、春から三回程度の研究会を開催、その中で叢書へ向けての執筆方針を確定し、来年度中の原稿提出を目標に活動を進めて行く予定である。

(校正直前の2009年2月15日に橋本先生がお亡くなりになられたとの報に接することになってしまいました。先生に執筆者に加わっていただけなくなってしまったことが残念でなりません。先生の御冥福をお祈り致します。)

(寺沢正晴)

研究グループ：言語変異研究

代 表：彭国躍

研究活動：

1. 資料調査：言語変異研究の資料収集，2008年10月26日～27日，京都大学，大阪大学。
2. 研究発表：「中国語と中国人の言語行動について」（彭国躍）『中国語を学ぶ魅力』御茶の水書房
2008年
「中国語敬語表現の歴史と現状」（彭国躍）『社会言語学会第23回大会発表論文集』
2009年3月
「現代上海の路名と社会」（彭国躍）『現代中国語研究論集』神奈川大学中国語学科編
2009年3月
「脚本に見られる中国語の謝罪表現の考察」（陶琳）『現代中国語研究論集』神奈川大学
中国語学科編 2009年3月
「日本人大学生の言語評価」（宮本大輔）『現代中国語研究論集』神奈川大学中国語学科
編 2009年3月

(彭国躍)

ジェンダー・ポリティクスのゆくえ

共同研究グループとして2009年度に出版を予定している叢書の内容についての討議を行ったほか、以下のような講演会と研究会を開催した。

1. 講演会
開催日：2008年4月23日（水）
会 場：20号館207号室

発表者：Ku Yenlin（台北市政府顧問）

演 題：「現代台湾のジェンダー問題」

2. 研究会

開催日：2008年7月15日（火）

会 場：17号館教職課程指導室

発表者：河上婦志子（人間科学部教授）

演 題：「女性だけの組織：オンタリオ女性教師協会連合（FWTAO：Federation of Women Teachers' Association in Ontario）」

発表者：井上匡子（法学部教授）

演 題：「ジェンダー論（フェミニズム）と法学の不幸な結婚」

（村井まや子）

1. コミュニケーション研究会

2. 講演会・研究会の開催

第1回研究会

日時：2008年4月16日（水）14：40～16：10

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏（東京大学大学院）：P.Slovic（2000）Rejoinder：「The perils of Viscusi's analyses of smoking risk perception（たばこのリスク論争について）」

第2回研究会

日時：2008年5月7日（水）15：30～16：30

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏：William D. Diamond（1990）「Effects of Describing Long-Term Risks as Cumulative or Noncumulative」について

第3回研究会

日時：2008年5月21日（水）14：40～16：10

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏：Sheldon Ungar（2007）「Public scares：changing the issue culture」について

第4回研究会

日時：2008年6月18日（水）15：00～17：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏：「温暖化問題に対する市民の意識（アンケート調査結果より）」

第5回研究会

日時：2008年7月2日（水）15：00～16：30

場所：17号館 401号室

発表：杉本 崇氏：「温暖化アンケートの分析結果について」

第6回研究会

日時：2008年7月22日（火） 11：30～12：45

場所：17号館 401号室

発表：杉本 崇氏：「喫煙リスクの蓄積性に対する認知について」

第7回研究会

日時：2008年9月5日（水） 13：00～15：00

場所：17号館 401号室

発表：杉本 崇氏：温暖化対策行動の主観的効果の規定因について

第8回研究会

日時：2008年9月12日（水） 13：00～15：00

場所：17号館 401号室

発表：杉本 崇氏：推論の二重プロセス理論と喫煙リスクの認知について

第9回研究会

日時：2008年10月15日（水） 15：00～17：00

場所：17号館 401号室

発表：杉本 崇氏：喫煙リスクを高める合理的な根拠とその伝達について

第10回研究会（兼人文学会講演会）

日時：2008年10月22日（水） 15：00～17：00

場所：17号館 216号室

発表：奈良由美子氏（放送大学）：「日常生活の安全に関する意識調査」の結果から

第11回研究会

日時：2008年11月5日（水） 15：00～17：00

場所：17号館 401号室

発表：杉本 崇氏：たばこの喫煙リスクについて

①リスク認知キャンペーンの掲示物について

②喫煙リスクの認知について（文献購読）

第12回研究会

日時：2008年11月19日（水） 15：00～17：00

場所：17号館 401号室

発表：杉本 崇氏：温暖化問題に対する市民の意識と行動について

第13回研究会

日時：2008年12月3日（水） 15：00～17：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏：喫煙リスクの認知に関する調査・研究について

第14回研究会

日時：2008年12月17日（水）15：00～16：00

場所：17号館401号室

発表：杉本 崇氏：喫煙リスクの認知と思考特性との関連について

3. シンポジウムの開催

特になし

4. 活動内容

直感的・感情的な人間の意識と行動は、利己的・合理的な前提に基づいて想定されている人間社会においてポジティブとネガティブの両面で様々な影響を及ぼしている。近年の教育からマーケティングまでに及ぶコミュニケーションの研究はこうした多面的な人間の意識と行動を理解し、それらを前提とした方法論の構築が求められている。この共同研究グループでは、こうした背景のもとで学際的な既存研究における到達点を明らかにするとともに、長期的でグローバルなリスクである温暖化問題及び中長期的で個人的なリスクである喫煙問題を事例として、人々のリスク認知と思考特性の影響について調査を行った。

植民地近代性の国際比較

本年は、新たに数名のメンバーの参加を得て、以下の3回の研究会を開催した。

第1回研究会：

開催日：2008年4月19日（土）

場所：神奈川大学横浜キャンパス 20号館417A号室

報告①：

報告者：坪井祐司氏（立教大学等非常勤講師）

東條哲郎氏（東京大学大学院・博士課程）

村井寛志氏（神奈川大学外国語学部）

論題：「マレーシア華人村落における抗日と冷戦の記憶

—ヌグリ・スンピラン，スランゴール2州での予備調査から—」

報告②：

報告者：舩谷鋭氏（立教大学観光学部）

論題：「新村形成期におけるマラヤ華人の現地意識について」

第2回研究会：

開催日：2008年7月16日（水）

場所：神奈川県横浜キャンパス 17号館 401号室

報告者：米谷匡史氏（東京外国語大学）

論題：「[「原点」と「流民」の思想
——谷川雁の九州／朝鮮／沖縄論——」

第3回研究会：

開催日：2008年11月15日（土）

場所：神奈川県横浜キャンパス 17号館 401号室

報告者：高城 玲氏（神奈川県立経営学部）

論題：「相互行為から見る国家：タイの国王誕生日と Village Scout」

（文責：永野善子）

新購入主要文献解題

ジンバルドの「監獄実験」(DVD)

原題は「Quiet Rage : The Stanford Prison Experiment」。2004年4月、イラク・アブグレイブ刑務所。米兵によるイラク人被拘束者に対する虐待行為が発覚した。最近その虐待に関係した米兵たちがその時の状況について証言を行った番組が放映された(2008年11月18日, NHK総合)。

イラクにおける虐待事件が発覚して、にわかに関心を集めたのが1971年に米国スタンフォード大学で行われたある実験である。それがこのジンバルドの「監獄実験」である。

スタンフォード大学の心理学者フィリップ・ジンバルド教授は新聞広告などで集めた大学生など21人のうち11人を全権力を把握する刑務官役、残りの10人を完全に無力な囚人役とし、大学の地下に作られた模擬刑務所の中で過ごさせた。実験の目的は普通の人がある肩書や地位を与えられると、次第にその役割にふさわしい思考や行動をとるようになることを実証することであった。当初実験は2週間の予定であったが、それぞれの立場からの振る舞いがエスカレートし、ついには危険な状態になったため6日間で打ち切られた。以後米国では同様の実験を禁止しているという。

実験に参加したカリフォルニア大学のクレイグ・ヘイニー教授(心理学)は、「囚人と刑務官に大きな権力差があるまま常に接触する刑務所特有の環境に原因がある。権力の格差はどこでもあるが、一般社会では通常離れて行動することで、こうした事態は起こりにくい」と分析する(読売新聞2004年5月19日)。

また当時世界を駆け巡ったあの虐待写真に写っていたリンデイ・イングランド元上等兵は禁固3年の刑を受け、現在仮釈放中である。一方虐待を告発した憲兵ジョセフ・ダービー元兵長は、米国内で裏切り者と呼ばれ、身の危険にさらされ、身をかくしつつの生活であるという(2008年11月18日, NHK総合)。

残念ながらこのDVDは英語版であり、解題者には映像だけが手がかかりであったことを告白しておく。お詫びとして、下に関連情報を挙げておきたい。

- ・岡本浩一『社会心理学ショートショート』, 新曜社
- ・映画『エス』サイト <http://www.gaga.ne.jp/es/>
- ・スタンフォード監獄実験サイト <http://www.prisonexp.org/>
- ・Wikipedia「スタンフォード監獄実験」
- ・人が悪魔になる時—アブグレイブ虐待とスタンフォード監獄実験(1)
<http://wiredvision.jp/news/200803/2008031323.html>

(人間科学部 三星宗雄)

購入図書解題

『中国教育年鑑』2004～2007年度版

『中国教育統計年鑑』2003～2006年度

いずれも、人民教育出版社刊

前者は、中華人民共和国教育部が編集する、各年の中国教育状況を網羅的に紹介する年鑑である。この年鑑の編集部による「編集説明」によると、「これは、各級教育行政部門、各級各類の学校が党と国の教育に関する法律・法規や方針・政策を執行し、教育工作を行った経験の総括であり、中国教育事業発展過程の真実の記録である」。

後者は、教育部の発展企画司が、全国各省、自治区、直轄市の教育委員会や教育庁が報告した学校に関わる諸数字を整理編集したもので、この年鑑の「説明」によれば、「中華人民共和国の教育事業の発展状況を全面的に反映した」ものである。

両者とも、以前から科研費の補助で入手しているものの継続購入である。

(大里浩秋)

新購入主要文献解題

『中国城市居民色彩取向及 2006 / 7 年色彩流行趨勢調査報告』

中国流行色協会編 2006 年

この文献は、中国流行色協会が実施した中国市民の色彩の好みに関するアンケート調査に基づく分析結果である。

この調査の目的は、(1) 2006～7年の市民の色彩意識の現状と変化予測を分析する、(2) ファッション・インテリ、美容、家電など市場における色彩変化と消費者の色彩意識を把握する、(3) 色彩に関わる商品の研究開発に対して基礎データを提供することである。

この調査のインフォーマントは、北京、上海、広州、成都、西安、武漢、ハルビンの市民 2914 名である。

分析の方法は大きく 4 つにまとめられる。(1) 都市間の比較分析、(2) インフォーマントの年代、性別、学歴による比較分析、(3) インフォーマントの収入に基づく経済状況による比較分析、(4) 国家公務員、会社員、自営業など職種、職位による比較分析

色彩のサンプルには、パントン (Pantone) のカラーカードから色相、彩度、明度、金属色などによって選出された 67 種類の色が使われた。

調査結果の一部を以下のように列挙する。

- ・全体の傾向として、最も好まれる色は薄い青色 (水色) で、最も嫌われる色は深い紫赤である。
- ・全体の傾向として、女性は男性より彩度の高い色を好む傾向がある。
- ・広州の人は、北京、上海の人より明度の高い色を好む傾向がある。
- ・学歴の高い人ほど青を好み、赤を嫌う傾向がある。
- ・室内の生活環境について、北京、ハルビンの人は上海、広州の人より暖色を好む。
- ・車について、最も好まれる色の上位順は、白、黒、シルバー、深紅、紫青である。
- ・口紅の色について、40 代以上の女性は、30 代以下の女性より赤を好む傾向がある。
- ・服装について、春と夏に最も好む色は白で、秋と冬に最も好む色は黒である。
- ・男性が妻やガールフレンドに最も勧めたい服の色は薄いピンクと白で、女性が夫やボーイフレンドに最も勧めたい服の色は黒と白である
- ・最も落ち着いた色は薄い黄色で、最も上品な色は紫である。
- ・最も男性らしいと思う色は黒で、最も女性らしいと思う色はピンクである。
- ・最も中国を象徴する色の上位 3 位は、真紅 (55.8%)、黄色 (7.5%)、金色 (7.0%) である。

本調査報告書には外にも現代中国市民の色彩意識を反映する多くの興味深いデータが示されている。

(彭国躍)

所員の自署紹介

『思考と発話—明示的伝達の語用論』

翻訳者：武内道子（内田聖二・西山佑司・山崎英一・松井智子と共訳）

研究社 2008年3月（616頁）

Robin Carston 著 *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. (2002. Blackwell: 418頁) の全訳。原著は、筆者の博士論文であり、認知語用論としての関連性理論 (RT) の集大成というべき書である。

RT が、他の語用論理論ないし語用論に隣接する言語理論に比べ、際立って異なっており、かつ優れているのは、経験科学を目指し、それに成功している点にある。このことを見落としている言語学者には、ぜひ本書の「はじめに」によって正しい認識を持ってほしい。

全体は5章からなる。第1章で、「言語形式は、それ自身命題を表現しきれない」という「意味決定不十分性のテーゼ」が提示される。一般の人々が気付かずにいることであるだけでなく、不思議なことに、言語学者の中にもこのテーゼを認めたがらない人がまだいる。話し手・聞き手が何を伝えようとしているのかの解釈には、聞き手の推論と、話し手による聞き手の推論への見積もりが必要で、その推論能力が一つのモジュールをなすことがこの章で説かれる。

2章では、グライスやグライス派による語用論の二つの区別、ことばで伝えようとしたこと (what is said) と、言外に推論のみで伝えようとしたこと (what is implicated) と対比させながら、RTによる区別がいかに上記のテーゼに即しているか、したがって現実の発話解釈を説明するかが、説得的に、明確に説かれている。3章から5章は、and 接続詞、否定辞を含む文の解釈、単語の持つ意味と個々の発話の場で話し手の意図した意味のギャップについて、明晰な説明がなされ

る。

本翻訳書は、「RTの俊才によるこの理論への最上の招待状である。原著者はまことに良い邦訳者を得た。5人の方々には著者の友人あるいは弟子、そしていずれもRTに詳しく、その理論内で仕事をしている。名著の名訳の誕生を喜ぶ」(『英語青年』2008年8月号の書評)。

2. 編著書

『言語の個別性と普遍性』

編著者：武内道子

神奈川大学言語センター 2008年3月（277頁）

神奈川大学言語研究センター紀要『神奈川大学言語研究』特集号であり、センターの共同研究会の一つ「対照言語学研究会」による第2の出版物である。2007年に同紀要が30号を発刊した。このことを記念して、神奈川大学国際交流(学術研究)事業計画へ参加しようということになり、「国際交流と言語科学」というプロジェクトを本研究会が立ち上げた。

2007年11月11日、横浜みなとみらいにある神奈川大学ポートスクウェアで、3人の外国人を招聘して「言語の個別性と普遍性」というシンポジウムを開催した。本書は、このシンポジウムにおける3篇のトークと、対照言語学研究会のメンバーによる論文7編を収めている。

対照言語学研究会は、多様な言語を研究対象としている者が集まって、すでに10年以上にわたって、言語の普遍性と個別性をテーマに研究を重ねてきている。個々の言語の表面的な事象に注意にのみ奪われるのではなく、人間の言語能力の解明という、高次の根本的問題に取り組んできた。本シンポジウムが人間言語としての特質を基盤に、各言語は組織的に異なるというテーゼを見せてくれたことは、本研究会のメンバーにとって貴

重なる研究の場となった。一方、センターが国際的
学術交流の場を提供したことは、神奈川大学への
大きな貢献である。

本書の出版は研究会の言語科学者と大学のセン
ター両者の幸せな結婚ということになる。



『世界のことば・辞書の辞典ヨーロッパ編』

著者：寺崎英樹

編者：石井米雄

三省堂 2008年8月（500頁）

本書はアジア編とヨーロッパ編の2巻から成
る。ヨーロッパ編ではインドヨーロッパ語族とい
う項目を含む35の言語の辞書および文法書が取
り上げられ、それぞれの分野の専門家により紹介
と批評・評価が行われている。筆者（寺崎英樹）
はその中の「スペイン語」の章（256-271頁）を
担当した。取り上げている内容は、スペイン語の
辞書編纂史、言語史上に輝く古典的な辞書、現代
の優れた一般辞書、百科辞典、対訳辞書および文
法書の各項目である。スペイン語はもとよりヨー
ロッパの諸言語の学習を志す人や日本と外国で刊
行された各種辞書について関心のある人には参考
になると思われる。



『思想体験の交錯—日本・韓国・在日1945年 以後』

著者：尹健次（ユン・コオンチャ）

岩波書店 2008年7月（500頁）

敗戦／解放から今日まで、日本と韓国は相互に
深く複雑に関わりあいながら、それぞれの時代の
課題と向き合い歴史を刻んできた。数々の資史
料、そしてそれぞれの時期の詩をはじめとする時
代の肉声を読み解きながら、そこに生きた人びと
の思想体験を跡づけ、なお問い続けられるべき思
想課題を展望した。在日朝鮮人二世の視点からす

る、思想史であるとともに文学書の意味合いをも
っている。ひとつの戦後史像の提出を意図した通
史でもある。

No.	名称	研究テーマ	活動計画	代表者	メンバー	人数	叢書
1	日中関係史	近代以降、現在までの日中関係の諸問題	1. 各自の関心に基づく講演会、研究会の開催 2. 中国人日本留学史と日本人中国留学史に関する調査研究 3. 中国における日本租界史の研究 4. 1945年直後における日・中・韓・三国間の戦時・戦後に関する論調比較	大里	大里・中島(三)・松本(安)・日高・山口(建)・鈴木(陽)・彰・村井(寛)・(非)吉川(良)・(非)橋(中)・(非)梁・(非)呉・(学外)小林(一)・(学外)李・(学外)川島・(学外)並木・(学外)木山・(学外)田畑(学外)三好・(営)貴志	21	2009年 検討中
2	文化のかたち	21世紀の新千年にふさわしい総合的な文化や文明の把握を目指し、新しい「知の地平」拓く。	2005年に叢書「文化のかたち。言語・思想・くらし」を刊行したが、第二弾を出版する目的として活動する。すでに第二弾の企画がいくつかメンバーから出ているので(日本とロシアの文化の様々な側面における交流や両者の文化比較をテーマとする)、本年度は研究報告等の研究活動を行うとして、本年度は研究報告等の研究報告の内容について中・中で調整しながら、叢書の具体的な内容について検討していく。また、研究報告会以外にも、メンバーにおいて計画が整えられれば、シンポジウムなども開催したいと考えてるので、検討していきたい。	堤	水野・岩本・羽佐田・小馬・鈴木(修)・堤・大須賀・石井(美)・ヒル・細田・駒走・マコトミ・小林(非)八島・(非)米重・(学外)湯田・(学外)赤坂・(学外)中本・(学外)佐藤(江)	19	2008年 検討中
3	西洋文化の受容—思想と言語—	日本の近代化に際しての、ヨーロッパ及びアメリカ文化の受容の研究	『明六雑誌とその周辺』を刊行後、共同研究グループとしての活動はしばらくブランクが続いているが、各自の個別的活動は、「表象としての日本」に再統合されたたり、新学料「国際文化交流学科」の授業に向けられたりされている。しかし本年度は、再び共同研究としてテーマを再考の上、定期的に活動を始めたかと思う。	鈴木(修)	鈴木(修)・伊坂・岡島・中島(三)・佐藤(夏)・孫・(法)吉井・(経)池上・(学外)高野・(学外)岡野(哲)・(学外)浅山	11	2003年 出版
4	物語研究	物語の構造分析 歴史叙述と文学	1. 研究会を4回程度開催ただし、今年度はメンバーが「共同研究奨励助成」とダブっているので共同で開催する予定。 2. ニュースレターを発行。ただし不定期。 3. 講演会の開催。 4. 叢書については、前記「共同研究」とも重なっているに、2008年度に刊行を予定し、物語研究のメンバーにも、引き継ぎ研究会を開催し、活動の充実を図りたい。	日高	日高・伊坂・鈴木(修)・鈴木(陽)・小馬(非)・鈴木(彰)・鳥越・村井(ま)・山口(三)・坪井	10	2008年 検討中
5	各国地方史の比較史的 研究—新編中国地方志叢書を中心として—	世界史を現存する国家、民族、文明ではなく、地方史という地域史的観点から見直すことを目的とする	年に4回の研究会を開き、各国、中国研究者と他分野研究者の発表を行うことを目指している。2007年度にも、引き継ぎ研究会を開催し、活動の充実を図りたい。	孫	孫・大里・岡島・村井(寛)・(経)柳沢・(営)廣田・(学外)佐々木・(学外)谷川・(学外)小林(一)・(学外)吉田・額賀・貴志(営)	12	検討中
6	自然観の研究	自然観の変遷と展望	1. 哲学、文学、環境学など異なる分野から「自然観」を追求している。昨年度から開催の研究会を通して、研究班としての共通軸を確立する。その上で、叢書としてまとめるための構想を練る。	佐藤(夏)	佐藤(夏)・伊坂・(非)岩崎・奥田・鈴木(修)・坪井・(営)復本	7	2008年 予定
7	東アジア比較文化研究会	日本、中国、朝鮮等の言語学、歴史、民俗などの伝承文化の比較研究	研究会と講演会を適宜開催していく。	山口(建)	山口(建)・福田・中島(三)・日高・大里・彰・鈴木(陽)・孫・小馬・前田(健)・(経)佐野・(経)河野・(営)田畑・(営)廣田	14	未定

(名) 名誉教授 (非) 非常勤講師 (学外) 学外研究者

